

2018（平成30）年度 東京大学 入試問題 第1問 解答例

一 直接的な観察によって知覚できない対象は、一連の理論的手続きによって、実在の間接的証拠が支えられているということ。

*この設問では、「素粒子」「物理学」といった例示で解答しないように注意したい。素粒子や物理学という例示の語句を用いて解答するのであれば、傍線部内の「その痕跡」という指示対象も、当然一般的な「間接的証拠」などではなく、「ミクロな粒子の運動のマクロな痕跡」などと置換されることになり、解答欄に収まらなくなる。

二 科学哲学で言う理論的存在は、実在性に疑いのない、直接観察できない対象を指し、決して観念的な非実在ではないということ。

*「虚構」ではなく「理論的虚構」である。その置換はできているだろうか。

三 歴史的出来事は理論的存在であり、直接観察できる個々の事物ではなく、関係性において捉えられて記述されるということ。

*答案の主題を「理論的存在は～」としてしまわないように。また、「「思考」の対象である」を適切に置換すること。ただし、「関係の糸で結ばれた」という比喻のままでは不可である。

四 知覚不可能な対象は、実在の確証が間接的証拠と一連の理論的手続きを不可欠とする理論的存在である。同様に、知覚不可能な過去の歴史的出来事の実在も、虚構とは異なる意味での、歴史学の理論である物語りと証拠による物語りのコンテキストを前提とするから。(一二〇字)

*理由説明は、主題と（あれば）限定条件が、論理的に解答の構文に必須となる。ここでは、主題は「歴史的出来事の実在は」で確定している。述部を限定する「フィクション」といった誤解をあらかじめ防止しておくならば」という条件も、解答に必須となるが、字数が大きいのので「虚構ではないとすれば」というくらいに圧縮しておくといよい。

五 a 蓋 b 隣接 c 呼称